

地域支援プロジェクト 地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 : 2016年度 (平成28年度) 報告書

著者	小澤 永治, 橋 佳代, 稲谷 ふみ枝, 小原 みさき, 江口 夏紀
ファイル (説明)	[表紙] 目次 学長/研究科長メッセージ 第1章 第2章 第3章 第4章 最終章 奥付
別言語のタイトル	Community Support Project Annual Report 2016
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029642

1. 高齢者へのライフヒストリーワーク実践

今年度も昨年度に引き続き、高齢者へのライフヒストリーワーク実践として、地域高齢者と関わりながらの面接調査と「私のアルバム」冊子づくりを行いました。

「私のアルバム」とは、霧島市の支えあいプラン2015の基本目標のひとつで、高齢になっても「地域で暮らし続けることができる仕組みづくり・サービスの充実」に資する、認知症ケアパスの普及・活用に位置づけられる施策です。その冊子に込められた意味とは、認知症になって介護が必要になったときでも、自分らしい生き方を諦めてしまうのではなく、自分らしく暮らし続けるための自分の人生や思いを書き綴って、介護が必要となったときに支援に関わる人や施設に提供し、その人の人生や思いを最後まで大事にして関わってもらうことを目的としています。

また、本プロジェクトは、臨床心理学研究科の授業科目である「エスノグラフィック心理臨床論」におけるアウトリーチ臨床活動の場として連携させて実践しました。大学院生の臨床調査訓練として専門職として高齢者福祉に関心を深めていくなかで、地域高齢者に対して面接し、アウトリーチ臨床活動としての基礎や面接調査におけるコミュニケーションや観察スキルについて学び、ライフヒストリーワークの成果物としての「私のアルバム」とその知見を地域に還元することを目的としています。

今年度は11月19日に、霧島市国分公民館にて、現地実習として事前学習と面接調査を実施いたしました。大学院1年生18名と教員1名が参加し、市役所職員、事業者協議会の皆様と一緒に地域にお住まいの高齢者と交流しました。

【参加者の感想】

- ・事前学習で紹介された鹿児島県の離島に生きる高齢者への支援や認知症の高齢者と海外旅行に行くプロジェクトなどの活動から、高齢だから障害があるからといって、その人の可能性を支援する側の都合で制限していないか、考える機会になった。
- ・地域福祉の現場に出向いて、高齢者や高齢者の暮らしを支える人たちと交流することで、地域支援を身近に体験する機会となった。
- ・お話をしてくださった高齢者のみなさんから、夫婦・家族の愛情、健康や友人を大切に生きること、自立して生きたいという前向きな姿勢など人生のいろいろを学んだ。



研修会の様子



地域高齢者との交流の様子

2. 子育て支援に関する研修会

地域支援プロジェクトでは、大学院生への授業と連動した事業として、「子どもの行動の理解とほめ方のコツ～ペアレント・プログラムから学ぶ～」と題した研修会を開催しました。

浜松医科大学子どもこのころの発達研究センターにおいて、ペアレント・プログラムの実践と研究に取り組んでおられる浜田恵先生をお招きし、初日は大学院生および支援者を対象とした研修会、2日目は地域の保護者の方を対象とした研修会を行いました。ペアレント・プログラムは、子育てが難しいと感じているご家族や、発達障害のお子さんをもつご家族に対して、段階的な支援を提供するプログラムであり、日本全国で普及が始まっています。

今回は導入として、ペアレント・プログラムの概要をお伝え顶きましたが、研修会を通して、子どもに対する理解や対応の視点を深めることはもちろん、保護者や支援者が日頃の関わりを振り返り、自信を持つ機会にも繋がったようでした。

～プログラムの概要～

- ・ペアレント・プログラムの基本的な考え方
- ・子どもの行動のとらえ方
- ・ほめ方のコツ
- ・ペアレント・プログラムの効果や感想



研修会の様子

【参加した保護者の感想】

- ・自分自身、子どもにどういふふうな言い方をすれば伝わるのか、悩むことが多かった。そのツールとして、今回の講義の内容がとても役に立つもの多くて、また、実践しやすい、取り入れやすい内容だったので、してみたいと思った。
- ・自分の心理的な状況、考え方について、自分の良い所や考え方が変わって、子供への接し方、みる視点が変わると思いました。大人の通りいっぺんとうの固定観念がじゃましているところがあると自覚できました。
- ・年齢が上がるにつれて、できて当たり前と思っていることも多く、ほめることが少なかったように思います。日々の生活の中で、「できていること」を少しずつでもほめていければと思います。